

『春告鳥』の構成

—シークエンスと宣伝を中心に—

崔 泰 和*

(e-mail : saikun25@gmail.com)

< 목 차 >

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1.はじめに | 3. 『春告鳥』における宣伝の役割 |
| 2. 『春告鳥』構成における春水流の組み立て | 3.1. 有名店の宣伝 |
| 2.1. 『春告鳥』の梗概 | 3.2. 叙情の場面をいかす泉目吉の宣伝 |
| 2.2. 春水流のシークエンス組み立て | 4. おわりに |

キーワード：交差編集(Cross-cutting), 泉目吉(Izumi Mekichi), 間接広告(Product Placement), 為永春水(Tamenaga Shunsui), 春水流(Shunsui Formulas), 広告(Advertising)

1.はじめに

為永春水のデビュー作である『春色鶯日記』(1840)の題目は、師匠の為永春水の『春色梅暦』(1832、以下『梅暦』)から「春色」と「日記(暦)」を、『春告鳥』(1836)から「鶯(鳥)」とを掛け合わせたものである。『春色鶯日記』の序文にみえる「そも梅暦の開けてより、是に並んで春告鳥の双冊をなし」という文からもわかるように「鶯日記」という題目は、『春色鶯日記』が『春色梅暦』や『春告鳥』ほどの人気を得られるようにという願いを込めた作名であった。また、春水の『春色梅美婦禰』(1841)第十二回にも、人情本に詳しいお園の様子を「人情本の博覧にて梅暦と春告鳥をば暗記文句をいふ娘なるべし」と『春告鳥』があげられている。要するに、『春告鳥』は、(少なくとも

* 광운대학교, 강사, 고전문학

春水にとっては) 『梅暦』に匹敵する春水の代表作であることがわかる。

『春告鳥』の刊行年については、全編が1837(天保8)年刊という説(神保五弥など)が有力であるが、小高恭は、初編は1836(天保7)年に刊行され、次編は1837年に刊行されたことを論証している¹⁾。小高恭は、『春告鳥』の刊行年に対する新しい資料をもって細かく実証しているので本稿では、この成果を踏まえて『春告鳥』の刊行年を1836年と捉えることとする。

『梅暦』は、斬新であったが、新趣向の試行錯誤や不慣れが露見されているところも少なくない。それに比べ『春告鳥』は、完熟された春水の小説構成法、「春水流」が自由自在、適材適所に使われている。これまでの先行研究では扱われて来なかった『春告鳥』の構成および趣向を確認し、春水人情本における『春告鳥』の位置について分析する。

2. 『春告鳥』の構成における春水流の組み立て

2.1. 『春告鳥』の梗概

春水人情本の筋書きは、とても組み入っており、その梗概を述べるに膨大な紙面を費やしてしまう傾向がある。なおまた、人気の作品であればあるほど、続編や続々編が組まれていくので、筋の複雑さは増していくばかりである。

『春告鳥』の主人公である鳥雅には三人(小浜・薄雲・お民—後のお花—)の女性に関係していく。そして、梅里とお熊、忠之丞と千鳥・お玉の関係が添加される。そこへもって、お熊の妹はお玉、お熊の妹分はお民(後のお花)と設定されている。まるで、現代のテレビドラマのように、女性の間にも複雑な関係がから混ぜられている三組の物語が『春告鳥』である。内容の紹介とその入り組み具合を示すために、『春告鳥』をもっともわかりやすく説明した前田愛の梗概をより短く縮めたものを提示しておく²⁾。

『春告鳥』の主人公は、鳥雅(富商福富屋幸衛門の次男)である。鳥雅は、異腹の

兄幸次郎と折り合いが悪かった。母は鳥雅を向島の別荘に住ませた。鳥雅は若隠居の

1) 小高恭(1989), 『為永春水覚書』, 名著出版, pp.1-11.

2) 前田愛(2000), 『春告鳥』, 『新編日本古典文学全集』80, 小学館, pp.600-601.

生活を送っている。鳥雅と小浜(深川芸者)は恋仲であったが、小浜は突然姿を消してしまう。鳥雅は、吉原のおいらん薄雲うすぐもに通いつめる。また、腰元のお民とも契りをこめる。鳥雅は、上方の店に預けられることになる。お民たみは安房の伯母のもとに身を寄せた後、大阪町の芸者となり、お熊くまの妹分お花と名のる。勘当がゆるされ、上方から帰ってきた鳥雅は、お花はな(腰元のお民)とめぐりあう。

お熊の情人は、通人の梅里ばいりである。ある夜、梅里は、女装した梶原家の老臣番場忠太夫ちゅうたゆうの次男忠之丞ちゅうのじゆうを連れてきて、お熊の庇護を依頼する。忠之丞は梶原家の先君の側室に上がるはずだった腰元千鳥ちどりと恋仲となり、主君の怒りに触れて切腹となる身を梅里にかくまわれていたのである。忠之丞は梅里の妹お玉たまに惹かれる。ここからは、続編『春色はるいろ離はなの梅』の内容である。忠之丞と結婚したお玉は、忠之丞の恋人だった千鳥ともむつまじく暮す。鳥雅は梅里の計策で、めでたくお花と結婚する。

この梗概は、場面の順番を時間順にかえ、わかりやすく要約したものである。実際の内容展開は、各場面が複雑に入り組んでおり、展開がわかりにくくなっている。この複雑さが意図的であることは、すでに述べたとおりである。よって、『春告鳥』の場面配置を分析することで、『春告鳥』における構成の意味が浮き彫りになるはずである。

2.2. 春水流のシークエンス組み立て

春水人情本における段は、映画のシーン(scene)、場合によってはシークエンス(sequence)と同じ意味で使われている場面の単位を称する用語である。段取だんどりは、この段をブロックのように組み立てていくことを称する春水が使っていた用語で、編集に値する行為である。春水は、一編ごとに必ず一回以上の段取(編集)を行い、同じ場面と登場人物が続かないようにしていた。このような編集は、その意図を認めない場合、構成のみだれにしか見えない。しかし、春水の編集は、読者の飽きを回避するための工夫であり、とくに映像文学でいう交差編集(Cross-cutting)と同じ技法であった³⁾。

『春告鳥』は、5編15巻の編成で、1巻に2章ずつあてられているので、合計30章を有

する。初編の1～2章は、吉原での鳥雅と薄雲の段である。3～6章は、段取(Cross cutting)され、向島での鳥雅とお民の場面になっている。鳥雅お民の段は、読者の涙をさそう鳥雅薄雲の段にくらべると、その鮮やかな衣装付けによるお民の色っぽさやいきな姿が際立つ。また、いざというときに入ってくる邪魔が滑稽で、読者の笑いをさそうシーンになっている。このように、涙と笑いという真逆の場面を配置させることも、読者の興味を引くための春水の意図、すなわち趣向であり、段取を行う理由の一つといえよう。そして、2編の7～8章(鳥雅と薄雲の段)と9～10章(新しく登場した友吉と仲次の段)も、同様の理由で段取りが行われている。

2編の最後になる11～12章には、順当ならば発端にくるべき鳥雅の身分や現在の状況に関する説明が記されている。かかる点が構成の乱れとしてみなされたところであろう。しかし、面白い場面を発端から描いて読者の興味を一気に引き寄せる「張り手形」技法に基づき、過去の場面を後ろに持ってくる段取(cut-back)によって、後回しされた説明の段としてとらえると⁴⁾、読者の興味を最優先にした春水の意図的な場面配置であったことがわかる。

また、11～12章では、鳥雅の説明が終わると、追い出されたお民の苦労が描かれており、お民が悪漢に強姦されそうなところで突然話が切られ、3編を期待させる次のような文句で締められている。

これより鳥雅お浜の再会、薄雲の実意、お民のきた、いとおもしろく聞伝へし実録を、
第三編に御覧にいれまいらすと、選者にかはつて

書林 文溪堂敬白

もっとも盛りあがるやま場で話を切り、読者や視聴者に続きを期待させる(春水が「文統」と呼んでいた)^{つなぎ}「クリフハンガcliff-hanger」技法が使われており、お民の話は次編に持ち込まれる。

緊張した場面からつながる3編はじめの13章は、深川の新地で9～10章に登場した友吉・仲次が再び登場し、当時の噂やゴシップを述べる楽屋落ちの場面として組み立てられている。ところで、仲次は『梅暦』の続編である『春色辰巳園』^{はつみのその}第5条にも、次のようにあげられていた実在人物である。

3) 崔泰和(2011), 『春水人情本の研究』, 若草書房, pp.151-153

4) 東京映画映像学校用語辞典(<https://tf-tms.jp/glossary/getword.php>), 「印象的・衝撃的な場面を物語の導入部に持ってくる形式。相撲の「張り手」から来た言葉」(検索日2018.05.25.)

新孝 「おめへさんが賞める唄妓はだれノ \ だろうす

関 「野暮なわけだが当て見さつし

新孝 「まづおめへさんの気にいりそうなものはトエ、難波屋の小浜、福田やの民治、西の宮で仲吉、それからトエ、

13章では、このような仲次との台詞のなかで、清元喜代太夫について、「喜代太夫は旦那思ひの男だから鳥雅さんの頼みはねへが恩返しに一骨折るというふから」と評判をす。実在人物の口をかりて発せられるゴシップは、より小説の現実感を高める効果が期待できるのである。

つづく14~17章の場面では、もう一つの主人公組の梅里・お熊が初めて登場する。一方、お民は、二編末に描かれていた危機から救われ、今はお熊の妹分になっている。お熊は、時には無邪気で、時には物事がしっかりと整った対応もできる、いきで洗練された婦人として描かれており、これまでに春水人情本になかった新しい女性像であった。春水は、このようなお熊に、お民と同じく二度の衣装付けを施している。一人の女性に二度の衣装付けという趣向をお民に続いてお熊にも行ったことは、外の春水人情本に大別される『春告鳥』の特徴であり、春水の新しい女性像と趣向に対する確信があったから実行されたものと考えられる。本稿では、いきという言葉も明確に書かれており、春水衣装付けの好用例になっている15章のお熊への衣装付けは、すでに取り上げられているので割愛⁵⁾、14章に描かれている衣装付けを引用したい。

此お熊も年は二十七八才なれども、いまだ定まる夫なく、(中略)まだ白歯でも憎からぬ風俗、殊に近年は少し時節にはづれたる歳増女の島田髷が、男の目に付て流行折かなれば、(中略)お熊が姿をこゝにしるさば、いま唄女を止てより却て其時の風はなく、黒袖に三つ亀甲の紋付、もつとも黒縹子織留の上に金銀にて蝶々を縫し野暮なる半襟をかけ、下着は本八丈の三升格子の黄糸、極色の薄き花色裏、紫の山まゆに媚茶の小鈍子を腹合にせし帯をめぐめ、襦袢の袖は兼房の小紋ちりめんへもへたつ様なる本紅の裏を毛抜合に付、半衿は大紋りんずを紫と浅黄にて握み絞りにしたる素人染の思ひ付き、もつとも衣紋の所へ紅入のゆふぜん染の胴が少し見ゆる。衿おしろいは松本の舞台香(住吉町松本幸四郎の店で売っていた白粉—筆者注)、顔は仙女香の別製、

お熊のいきで美しい姿の描写にとどまらず、現代のテレビドラマや映画などの女主人公の衣装と同じく、PPL(間接広告)も見て取れる。舞台香や仙女香などの化粧品がそうである

5) 前掲書, 崔泰和(2011), pp.18-49.

が、これについては後に詳しく述べたい。

3編の最後になる18章は、段取が行われて鳥雅の段になる。鳥雅の夢の場面という設定ではあるものの、現代のアクションシーンに該当する立回りの場面で、2編末と同じく「クリフハンガー」の手法で括られている。

18章に続く4編の19～22章では、鳥雅と薄雲の場面になる。泉目吉の人形が宣伝とともに内容展開の重要な素材として使われていることについては後述する。23章は、梅里お熊お民、24章は鳥雅お熊の場面が交差編集されて段取が行われる。

そして、5編になると25章では鳥雅お民の場面が描かれ、大尾の30章で二人はめでたく結ばれる。その間の26～29章には、続編に備えた新しい登場人物の顔見世の場面で埋められていく。各章における主要人物をまとめてみると、次表のとおりである。

1	上巻		中巻		下巻	
	1章	2章	3章	4章	5章	6章
	鳥雅薄雲		鳥雅お民			
2	上巻		中巻		下巻	
	7章	8章	9章	10章	11章	12章
	鳥雅薄雲		泉目吉		鳥雅 / お民, cliff-hanger	
3	上巻		中巻		下巻	
	13章	14章	15章	16章	17章	18章
	泉目吉		梅里お熊 小尾			鳥雅
4	上巻		中巻		下巻	
	19章	20章	21章	22章	23章	24章
	薄雲		鳥雅		梅里お熊お民	鳥雅お熊
5	上巻		中巻		下巻	
	25章	26章	27章	28章	29章	30章
	鳥雅お民	小浜千鳥	梅里お熊	中之丞お玉		鳥雅お民など

絵1 『春告鳥』5編15巻30章の登場人物

主な関係の鳥雅・薄雲は9章、鳥雅・お民7章、梅里・お熊7章という分量になっていることがわかる。1編が6章の分量なので、各ストーリーは1編から1編半の分量を有することになる。各主人公組ごとに順当に配置しておけば安定的な構成になるはずである。しかし、この表からも見られるように、春水は、意図的に各ストーリーをミックスさせ、読者の興味を持続させていた。かかる編集が春水流のもっとも大きな特徴であり、『春告鳥』にも例外なく使われていることがわかる。

3. 『春告鳥』における宣伝の役割

3.1. 有名店の宣伝

春水人情本には、多くの広告が現代のPPL(プロダクトプレイスメント)のように挿入されている。とくに、『春告鳥』には、その宣伝の数と品の種類が多い。したがって、『春告鳥』に見受けられる宣伝は、春水人情本における宣伝の用例として多く取り上げられてきた。たとえば、他の小説や浮世絵にも頻繁に登場する書物検閲を担当していた和田源七の「仙女香」と、春水自ら販売していた歯磨き「丁子車」の宣伝がそれである。お民が流行をよく知る女であることを示すために使われた豊嶋町伊勢屋のお茶「清風軒」の広告や、新商品の販売促進の目的が明らかに確認できる好例として本郷の伊勢伝の「紫金錠」(外神田紀伊国屋の紫金錠が有名だった)の宣伝も取り上げられてきた。

また、『春告鳥』には「仙女香」や「丁子車」などの恒例の宣伝だけではなく、当時の有名店の宣伝も多かったことに気づかされる。『春告鳥』27章に宣伝されている「万久」は、江戸の名物を紹介する「東都贅高名花鏡」^{ぜいたくかうめいはなくらべ}番付(19世紀中盤)の二段目に「芳町料理万久幕の内」と記されているほど有名であった⁸⁾。それは、次にあげる「東都高名会席尽」に「幕の内」弁当が描かれていることから確認できる⁹⁾。



絵2 「東都高名会席尽」
「万久」

『梅暦』にも、深川にあった「小池」という会席料理屋が宣伝されている。「小池」

8) 林英夫・芳賀登編(1973),「東都贅高名花鏡」,^{ぜいたくかうめいはなくらべ}『番付集成』, 柏書房, p.229.

9) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1308529>(検索日2018.06.01.), 国立国会図書館デジタルコレクション- 万久・髭の意休.

は、春水の友人でもある桜川由次郎が運営していたところであり、春水が売っていた「初みどり」の取次所でもあったが¹⁰⁾、「万久」の名声には至らなかった料理屋であった。

なお、『梅暦』6齣では、鰻屋の宣伝も行われている。高橋にある鰻屋が場面の背景として使われおり、そこでまた「たいそふ煙る。出前でも沢山焼そふだ。どふも素焼きの匂ひがきらひだ。これには山谷がいゝの」という台詞が綴られている。この高橋にある鰻屋については、後編のはじめの挿絵に「柳川」という名前が示されている¹¹⁾。ただ、1852年板の「江戸前大蒲焼」番付には、「柳川」という蒲焼屋は通四という他の場所にあり、高橋には「いかだ屋」という店があったこととなっている¹²⁾。いずれにしても「高橋にある鰻屋」の屋号は特定できないものの、「江戸前大蒲焼」番付によると「柳川」も「いかだ屋」も前頭にランクされている。

ところが、『春告鳥』に取り上げられている蒲焼屋は、「柳川」や「いかだ屋」より有名な店であった。15章には、次のような文がある。

梅「ア、もし、お清どんノ、どふぞおまへ往くおくれなら御如才もあるめへが、此間の通りに親父ばしの和田で大概なのを沢山と焼て、お飯を付てよこせと、言付て来ておくれ。

「親父ばしの和田」というのは、親父橋にあった「大和田」のことであり、「江戸前大蒲焼」番付には、相撲において取組を裁く行司役に位置されているほど有名な店であった。このように、『春告鳥』には有名店が宣伝されている現象は見受けられるが、店を確定できる根拠が少ないため、その理由について述べることは難しい。ただ、あくまでも想像の域を出ないが、『梅暦』の大成功によって『春告鳥』への期待が高まり、有名店も春水人情本という媒体に広告主として参加するようになったのではなかろうかと推される。

3.2 叙情の場面をいかす泉目吉の宣伝

春水の『^{たまつばき}娜真都翫喜』における「小倉山」の宣伝のように、春水人情本の広告は、宣伝という第一の目的を超え、伏線などの小説の構成を面白くする素材としても使われていた。春水人情本での広告は、内容や構成の妨げにならない程度の消極的なものではなく、作品を面白くするという積極的目的のためにも使われていたのである。

10)中村幸彦(1983),『春色梅児誉美』,『日本古典文学大系』64,岩波書店,p.251.

11)上掲書,中村幸彦(1983),p.84

12)林英夫・芳賀登編(1973),「江戸前大蒲焼」,『番付集成』,柏書房,p.225.

『春告鳥』にも「小倉山」のような役割を果たす宣伝があった。泉目吉の人形である。泉目吉は、春水の『春色恵の花』(1836)にも登場する。春水人情本の宣伝を通して、より名を広めた泉目吉は、2年後の1838年に回向院での見世物で大成功を収めた。有名人になった泉目吉の人形を作品の内容にかかわる重要な素材として、春水が再び『梅之春』(1838)で使うことで、宣伝と小説の面白さの間に好循環が起きていたことは、前稿にて分析済みである¹⁴⁾。

そして、泉目吉の人形は、その1年前の『春告鳥』20章(1837)にも、小説の重要ガジェットとして使われている。鳥雅のことで塞いでいた薄雲のために、吉兵衛が人形を拵えてくる。薄雲は、その人形が鳥雅に似ていることに嬉しくなる。その人形の顔を見ると自ずと鳥雅が思い出され、その悲しさに涙ぐむという内容が20章の場面である。人形は、泉目吉の宣伝とともに薄雲の心理の変化を表す絶好の素材として、次のような具合で使われているのである。

薄 「ヲヤなぜぎますえ　　そで「それでも泉目吉とかの人形つを二つ持て来なまして、一つ能顔の方をば私に見付らねへ様に隠して置なましたよ。あれをばたしかに帰なます節、何所かかわひがる所へ持てお出なんすに違ひはありませんよ。(中略)

吉 「マアノ、其様に腹立ねへで持て来なよ。左様すると直に人形の遣所がわかるからといはれてお袖はやうノ、かけだしてゆき、三つをれの木ぼり玉眼入の人形お持来る。(中略)サアおらん、お前には此木偶の住所が知れるだらふねといはれて薄雲は不思議そふに手にとり上(中略)

薄 「ヲヤ、とうれしそふににつこりとわらひ、誠にノ、鳥雅さんによく似て居いすねへ(中略)

吉 「おらん、嬉しくもなひかね。目吉にあつらへて鳥雅さんの似顔の木偶とは、随分老人の穿ちには憎くもあるめへ。おらんへはい、土産の積だが、お気に入ないかね。

薄 「ヲヤノ、左様ですか。寔にうれしふあります。ほんに左様お言なんすので思ひ出しましたが、あの目吉さんとかいふ木偶師は鳥雅さんがひるきにさつしやる人さんで、去頃一度連れて来なましたつけ。それぎますから鳥雅様の顔を此様によく似るようにこしらへてくんなましたのぎます。吉兵衛さんへ、まことにお有がたふぎますよ木偶を抱て顔を押付て、嬉しき思入れ(中略)

それぞれに休み、薄雲も床にいらて、お袖が明察のごとく彼人形を枕の際に抱そへて、しけノ、と顔を見てまた思ひ出す鳥雅の事、只何となくかなしさが増りて、

14)前掲書、崔泰和(2011), pp.49-77.

涙をはらノヽノヽ、兼言つもりし枕の上ぬれて、ホロリと人形のかほに落せしな
みだを拭、口のうちに
薄「ヲヤ堪忍なんしよ。

また、第20章にある挿絵にも、人形の箱に「人形師泉目吉作」という文字が見受けられる。



絵3 『春告鳥』第20章—泉目吉鳥雅似顔人形

鳥雅の似顔人形を見て本物の鳥雅を見ているような気分になったのは、泉目吉の腕がいいからである。状況にぴったり合う宣伝から続く薄雲の独白シーンは、鳥雅を思う薄雲の実意が見事に描かれた「いき」の場面としてあげられよう。泉目吉の人形は、読者を涙をさそうための重要なガジェットとして使われており、宣伝を超えて作品の内容にまで影響を及ぼしているもう一つの用例であると考えられる。

4. おわりに

複数の物語を交差編集し、意図的に入り組んだ内容展開にさせることによって、構成は一貫しているようには見えなくなる。そして、『春告鳥』の後半は、春水連といわれる門人らによる合作で¹⁵⁾、構成の複雑さは増すばかりであった。この問題を指摘する林美一は「春水の小説構成法は、読者が読みたいと思うサワリ場面集を、時間的な順序かまわずカスガイでつないだようなものである」とも述べているほどである¹⁶⁾。春水流の構成に対する

¹⁵⁾前掲書，前田愛(2000)，p.8.

批判は、春水が「偏屈者」(『いろは文庫』31回)と呼んでいた人々によって、当時から相次いでいたものであった。

それにもかかわらず、春水の人情本は、膨大な人気を博していた。また、春水流の構成についても、批判一色というわけでもなかったようだ。『春告鳥』三編序には、当時の作家志望者がこぞって春水に弟子入りを願っていたことが、次のように記されている。

近年看官御ひみきの御余光によつて、遠方の俊才、近里の君子、草扉におとづれて、物好にも愚なる業の門人とならんと乞給へど、楚満人たりし時の門生等にこりてその求めに應ぜず。余儀なき門人ありといへども、前々の如く其作をもつて予が名をしるす草紙は、以後かならずある事なし。いよいよ愛玩を願ふになん。

文飾が目立つ春水の自己顕示の場ではあるものの、『梅暦』から始まった春水流の小説構成法は、多くの作家志望の人々に注目されていたことが垣間見られるといえよう。また、門人の書いた場面に春水の「名をしるす」ことはないと述べているところも守られており、校合のところには、為永春笑・為永春蝶・為永春暁など、携わった門人の名が明記されていく。たしかに「春水なりの正直さをみてとることができる」ところである¹⁷⁾。なお、商品や料理屋、実在人物などの場合と同じく、春水連の名前を露出させることで宣伝の効果も得ていたことも見逃せない。

「我ながら人情本は、その極意を得たるかな、其主要を得たる哉、と自賛をしるしてはしがきに備ふ」(2編序)と述べているように、『春告鳥』は、適時適所に施されていた春水流の技法、広告の扱い方、複雑な人物関係の配置などをもって春水流の頂点に達していた。

春水流という試みは、大成功であった。春水が描いている人情が、色情のみに留まっては、これほどの成功に耐えうることができない。春水は、9章末の「作者曰く」をかりて、人情とは、(色情だけではなく)人に情けをかけることだと主張している。

よくよく察して衰れを知り、他人のことにてもよそよそしく聞捨ず、情けをかけるを人情のおもむきを知る人といふべし。愚智のぐちたることを記せば、世間の衆徒の口やかましきを防がん為に、愚なる分解をこゝにいふのみ。

16) 林美一(1970), 「為永春水の『春色初音之六女』」, 『国文学解釈と鑑賞』435, 臨時増刊号, p.75.

17) 前掲書, 前田愛(2000), p.476, 注19参照.

「世間の衆徒の口やかましき」ことは防げたとはいえ、春水の人情については曲解されてきた。しかし、門人が書いた場面を春水のものにしないという「春水なりの正直さ」は、春水人情本における人情の本意が色情ではなく、人に情けをかけることと主張していたことに対しても同じく正直であった¹⁸⁾。

『春告鳥』は、春水人情本の方針や意図を、広く多数の者に向かって知らせるためのマニフェストでもあったのである。

【参考文献】

- 小高恭 (1989), 『為永春水覚書』, 名著出版, pp.1-11
前田愛(2000), 「春告鳥」, 『日本古典文学全集』 80, 小学館, pp.600-601, p.8, p.476
崔泰和(2011), 『春水人情本の研究』, 若草書房, pp.151-153, pp.18-49, pp.49-77
_____(2017), 「Humanity theory of Syunsui Ninjobon」, 『Japanese Studies』 51, Institute of Japanese Studies Dankook University, pp.241-262
林英夫・芳賀登編(1973), 『番付集成』, 柏書房, p.225, p.229
国立国会図書館デジタルコレクション- 万久・髭の意休. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1308529>
(検索日2018.06.01.),
中村幸彦(1983), 『春色梅児誉美』, 『日本古典文学大系』 64, 岩波書店, p.251
林美一(1970), 「為永春水の『春色初音之六女』」, 『国文学解釈と鑑賞』 435, 臨時増刊号, p.75

논문 투고 일자 : 2018. 06. 29.
논문 심사 일자 : 2018. 07. 31.
게재 확정 일자 : 2018. 08. 03.

18) 崔泰和(2017), 「Humanity theory of Syunsui Ninjobon」, 『Japanese Studies』 51, Institute of Japanese Studies Dankook University, pp.241-262.

<要旨>

『春告鳥』の構成—シークエンスと宣伝を中心に—

崔泰和

本稿は、これまでの先行研究ではあまり扱われて来なかった『春告鳥』の構成および趣向を確認し、『春告鳥』に春水の小説構成法である「春水流」が適材適所に使われていることを考察することにより、春水人情本における『春告鳥』の位置について分析したものである。『春告鳥』は、各主人公組ごとに順当に配置していれば、安定的な構成となるはずの作品であった。しかし、春水は、まるで公式を当てはめるかのように、徹底的に各ストーリーをミックスさせる春水流の場面配置を施していた。また、『春告鳥』では、人形師、泉目吉へのPPL(Product placement)が行われていたが、それは、小説の構成にも影響を与えるほど内容に合致したものであった。つまり、鳥雅に対する薄雲の真心が、宣伝を兼ねて登場させた泉目吉の人形によって、より読者に伝わりやすくなっていたのである。『春告鳥』には、春水が読者の人気を得るために使っていた春水流の技法が完成された形で駆使されている。それについての自負自賛は、作品のいたるところに散りばめられている。『春告鳥』は、春水流という春水人情本の方針や意図を、広く多数の者に向かって知らせるためのマニフェストでもあったのである。

Composition of *Harutsugedori* : Focusing on sequence and advertising

Choi, Tae-Wha

Very little research has focused on the twentieth-century *ninjōbon*(young romance) novel *Harutsugedori*. The present paper reports the result of research on the configuration and ideas of *Harutsugedori* that have not been discussed in previous studies. As long as it was aligned for each main character pair, *Harutsugedori* was a novel that could have a stable composition. However, Tamenaga Shunsui had a scene placement of “ShunsuiFormulas ” that thoroughly mixed each story, as if applying a mathematical formula. Further, in *Harutsugedori*, a product placement (PPL) was added for the doll maker Izumi Mekichi, but it matched the content enough to affect not only the propaganda but also the composition of the novel. To sum up, the doll of Izumi Mekichi serves not just to advertise, but also to convey the true heart of Uusugumo thinking of Chogato readers. In *Harutsugedori*, the technique of “Shunsui Formulas” that Shunsui used to gain popularity with readers was used in the completed form. Self-esteem is a strong motif in the novel. *Harutsugedori* was also a manifesto to communicate widely Shunsui’s *ninjōbon* policies and the “Shunsui Formulas.”